

レコードに関する言説としての音楽鑑賞教育書
——大正期における音楽教育とレコード産業の交差——
大寫 徹

1924年出版の山本壽『音楽の鑑賞教育』と津田昌業『音楽鑑賞教育』は、日本における音楽鑑賞教育書の先駆けとされる。ともに米国ビクター社 *Music Appreciation for Little Children* (MALC) の翻訳にもとづいており、教育書でもあり商品カタログでもあるという両義性をもつ。本論文はその両義性に注目して出版背景を検討し、大正期の音楽鑑賞言説が学校教育とレコード産業の交わりの中で形成されていたことを論じる。

山本と津田の書籍は、それまでに断片的に提示された音楽鑑賞教育論を統合するべく出版された。しかし大部分が MALC に依拠しているため、学校教育に即座に応用できるものではなかった。1924年に両書が同時に出版されたのは、教育上の必要性よりもレコード産業の動向が関係していた。この年には、レコード輸入事業が活発化し、レコードを紹介したり評論したりする文章が盛んに書かれるようになった。その潮流の中で両書籍も出版され、レコード解説書と読者が重なることが期待されていた。そのことを本論文では、輸入レコードを販売していた十字屋楽器店が津田の書籍を出版した経緯から分析し、レコード産業との関わりから音楽鑑賞教育の言説が浮上していたことを明らかにする。